

裏街広場キャンパス化計画

—『地』と『図』の関係性にみる建築と都市—



『建築に都市を内包する』

この言葉の魅力に取り付かれて以来、作品を作りながら自分なりに答えを探ってきた。この研究も、都市という抽象的で捉えようのないもの、さらにはその魅力というものを少しでも説明したいがために行ったものである。

まず、都市で用いられる『街路』という言葉を建築内部で用いた例を分析することで、そのきっかけを求めた。

その中でも、『地』と『図』の都市構造の関係性をメタファーに建築が作られているものがあった。

このような建築作品の特徴として、『地』は、図と明確な違いを保つことで部屋と部屋をつなぐという緩衝帯の役割を持ちつつも、活動が溢れているという、両義性を獲得した空間が実現されていた。

『地』という空間を表の空間にすることが、実際にできているのだから、都市の中で、同じように『地』と『図』の関係性を持ち、『地』が裏となっている場所があれば、それを表に変換することができるのではないだろうか。

こういった流れで、計画されたものは、結果的に都市と建築の中間の構築物が出来上がったと思う。ここに、『建築に都市を内包する』に対するひとつの解答を見出すことができたと思う。



□『地』と『図』の関係性にみる都市

1748年にノリは、ローマの都市構造を地と図によって表現した。

街路や広場が、建物の外壁の足元まできちっと舗装されているため、屋外にも、室内のような要素が認められ、地と図を反転しても、影響が無いことを示した。

つまり、内部の空間と外部の空間とがクオリティとして近似していることとなる。

建物の壁面が、広場や街路を縁取る輪郭となり、『図』としての性格を保持しているともいえる。

□日本における地と図の反転のポテンシャル

道路と建物の関係において、日本では建物が敷地いっぱいに建てられるとは限らないことから、道路と建物との間に曖昧な残部空間ができてしまう。

このような都市構造の違いから、イタリアのような『地』と『図』の関係性は、日本では見出しにくいとされている。

しかし、街区レベルまでクローズアップして見ると、日本でも街区内に『地』と『図』が反転するようなポテンシャルを発見することができた。しかし、その地の空間は裏となっており活用されていないのが大半である。



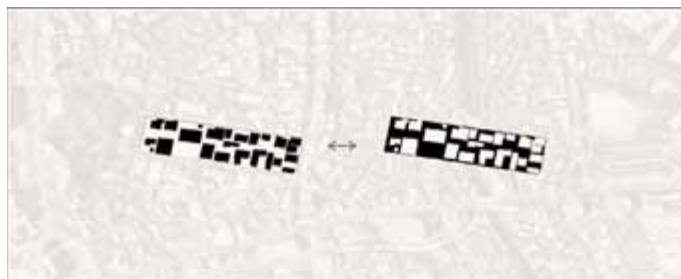
反転可能な『地』と『図』の可能性を 日本において探る

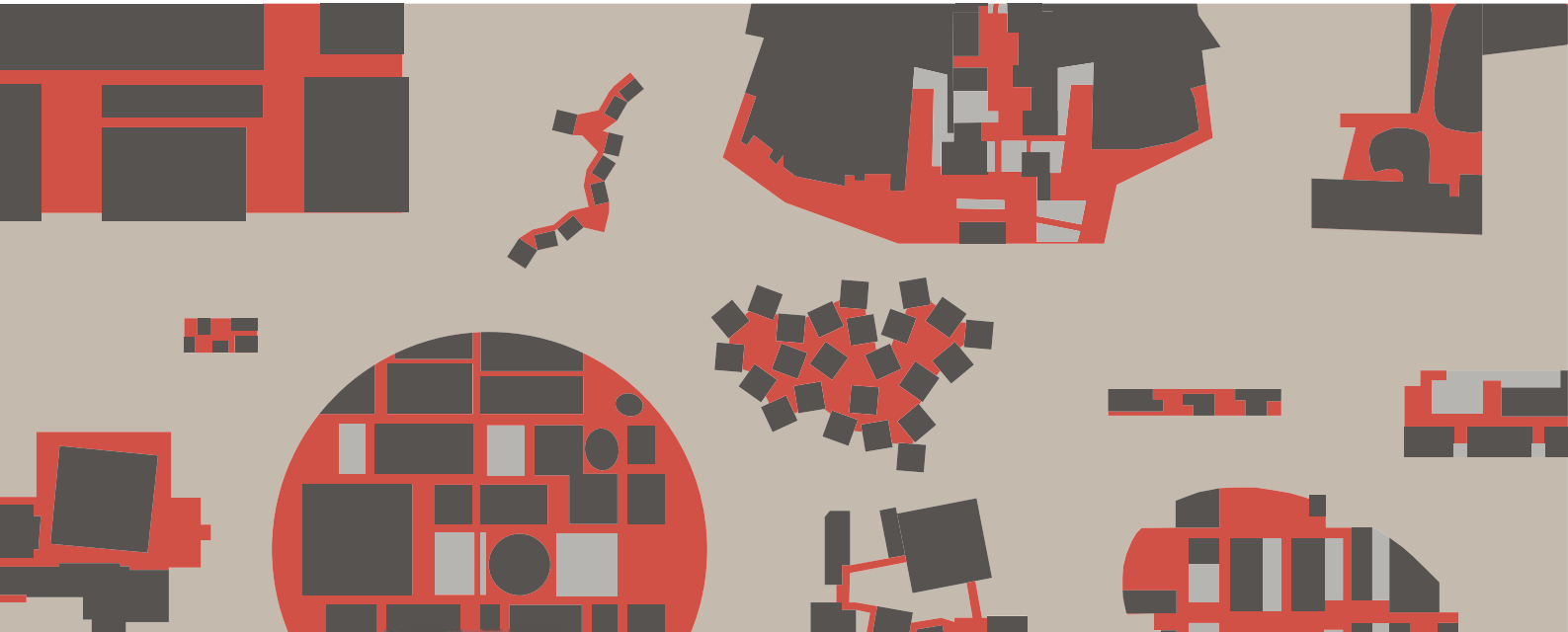
街区レベルまでクローズアップして見ると、

日本でも街区内に

『地』と『図』が反転するようなポテンシャルを発見することができた。

1





『地』と『図』の都市構造を メタファーに作られた作品を探る

2

街区内にできている、建物によって囲まれた空間をパブリックスペースへと変貌させる方法を、

『地』と『図』の都市構造の関係性をメタファーにして

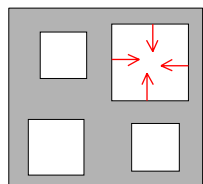
作られた建築作品を調べることで、見出した。

□『地』と『図』の関係性にみる建築

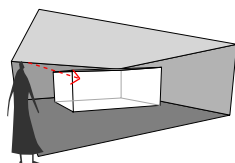
事例で集めた作品は、建物の大小や利用人数にかかわらずに、用いられていることが特徴である。

建築の内部空間では、『図』を壁で囲まれた部屋、つまり個室として作り、『地』はそれらをつなぐ空間、つまり共用空間として作られている。

内部空間において、『地』と『図』の関係性を保つことは、空間を間仕切って作られるものと明らかに違う。『図』の空間には、求心性が与えられていて、境界はウチを作るために存在し、『地』の空間には、部屋を見るという視点が獲得されている。



『図』：求心性



『地』：部屋を見る視点

□事例研究の成果

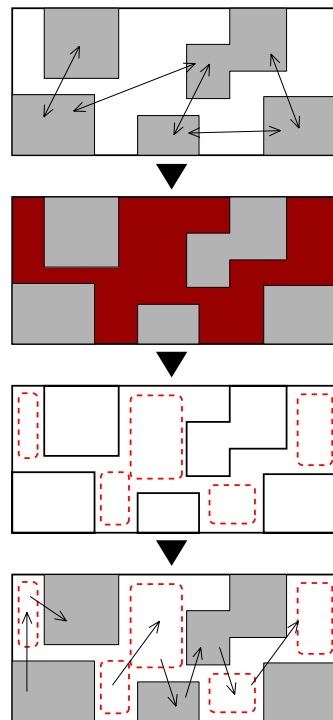
『地』と『図』という明確な違いを保ちつつも、2つのクオリティを等価にし、『地』の空間でも活動が溢れているような状況を実例から読み取った。実例分析を通して、以下のような成果が得られた。

実例では、図の空間を分散配置や凹凸配置することにより、都市のような地と図の関係性をつくり出している。

そしてその配置により、地の空間は、狭い空間、広い空間、明るい空間、暗い空間など、個性を持った場を見出しながら、ひとつつながりに混在する状況を作り出している。

この個性ある場は、利用者にそこでの行為を誘発し、アクティビティを発生させる。このとき、地の空間は単なる「つなぐ」という機能をを超えて、目的地へと変わる。

ひとつつながりになっているため、目的地が次から次へと現われ、人々を奥へと引き込むことになる。



事例研究から得られた成果を応用し、

対象敷地の空地に「目的」を見出せば、人々を奥へと導き、

裏をパブリックスペースとして活用できる可能性があるのではないだろうか？

3



□project概要

今回敷地に選定した場所は、新宿駅に程近い代々木2丁目の一街区である。周辺にはオフィスビル・商店・学校・そして住宅が広がっており、対象となる敷地は、それらの接点となりうる場所だ。

この街区では、4～5階建ての中層のオフィスビルによって囲まれた「ある程度の広さを持った空地」を見出すことができる。

しかし、現時点では、その空地は裏となっており活用されていない。さらに、歯抜けの場所からその裏が街にさらけ出された状況になっている。

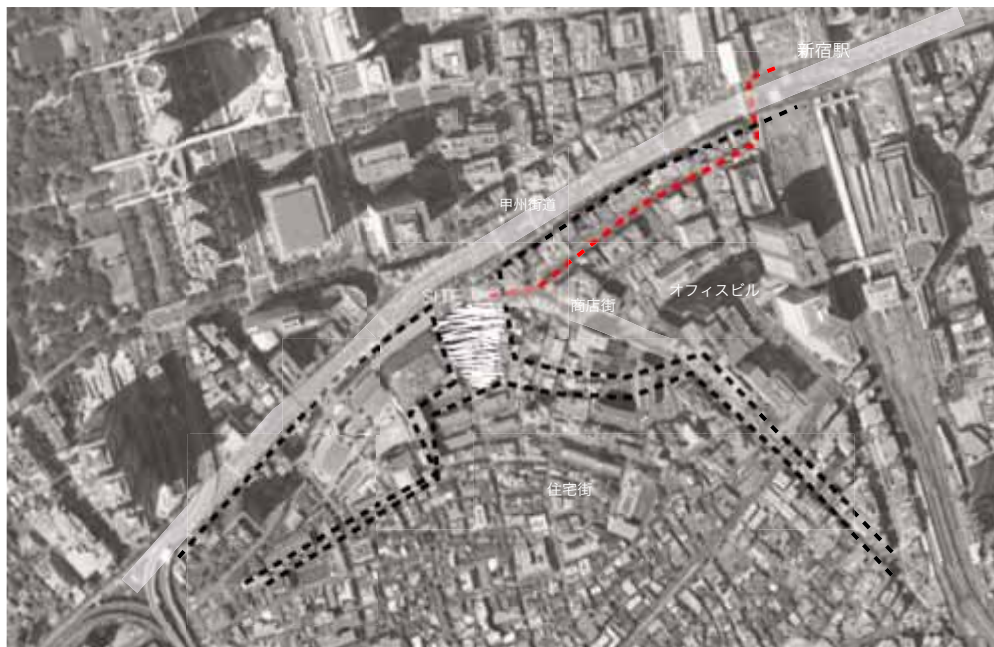
駅から近いという立地条件であるが、裏となっているということに加え、空きオフィスビルの問題を抱えるこの場所に対して、コンバージョンとビル連結という複合的な手法を使っていく。

つまり、街区内のオフィスビル群を一つのまとまりとしてみて、既存にある関係性を保ったまま、『地』となっている場所に価値を与えていく。

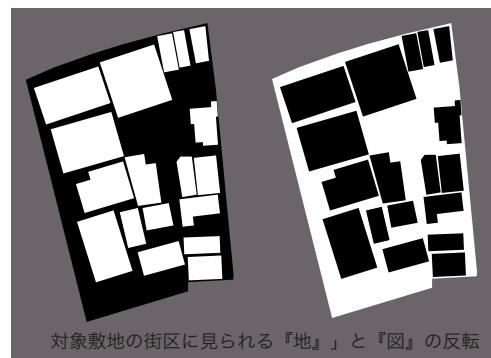
その際、一街区をそのまま、建替えるのは現実的でない。よって、街区内としては、3期にわたってコンバージョンしていく。さらに、将来の可能性として、隣接する緑道公園や文化女子大学のテラスなどと、つながる可能性も示唆している。

このとき、さまざまな用途が考えられるが、今回は、駅からの利便性に加え、オフィスビルの転用を考慮し、大学のサテライトキャンパスを提案する。具体的に示すために、美術大学のサテライトキャンパスと仮定した。

既存の建物には教室・スタジオを入れており、空地を、学生たちの活動を溢れさせ、街の人にも裏街の広場として使われるように活用している。



SITE:代々木2丁目



対象敷地の街区に見られる『地』と『図』の反転

トータルとしての操作

□二次発生的なイレギュラーな空間の発見

まず、既存の状態で、建物によって囲まれた裏の空地には二次発生的にできたイレギュラーな空間を発見することができる。
それらの特徴として、大小様々であることと、高低差により断面的にも違いが見られる。

□室内化と屋外化

その中で、活用されそうな空間は、保持したまま、それらをひとつづきにつなげるため、ところどころで、既存に手を加えている。
また、屋根をかけて屋内化するところとかけずに中庭として機能させるところを作ること、さらにはレベル差のある屋根を架けていくことによって、個性を持った内部空間を作り出している。

□街の街路とつながる

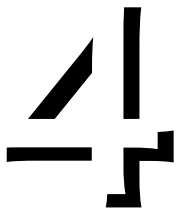
屋内広場は、街路とつながることで、学生や地域の人の、さまざまなアプローチを可能とする。
内部空間ではあるが、街の人を呼び込むパブリックスペースとして機能させる。人々は、回遊・通り抜けをしながら、学生たちの活動を日常的に垣間見ることができる。



既存図面



街区単位でのコンバージョン



既存の街並みに溢れだした「地」の空間は、人々を引き止める。

建物の隙間から、学生達の活動が垣間見れ、奥に賑わいを発見することになる。

このとき、**今までの空地が目的地へ**と変わる。

このように、既存の建物と裏をつなげていくことで、日常的に学生の活動が溢れだす『裏街広場』となる。